

# 令和元年度 学力向上先進地域視察研修報告 (埼玉県・久喜市教育委員会、羽生市立羽生北小・羽生南中学校)

## Dグループテーマ:「学校全体の組織力、家庭・地域との連携、及び児童生徒の『非認知的能力』の育成」

### 取組の実際

※各グループのテーマは、学力向上プランの5つの視点に基づいています。

#### ◇ 全職員による連携した研究組織

羽生北小では研究の組織として、研究授業の実践を進める【授業研究部】(国語部)(算数部)と学習環境づくりを進める【学習環境部】(調査統計部)(環境整備部)(広報部)による連携が図られていた。南中では学校全体で①授業の構造化②場の構造化③時間の構造化を横断的に統一していた。

#### ◇ 適材適所による人材育成

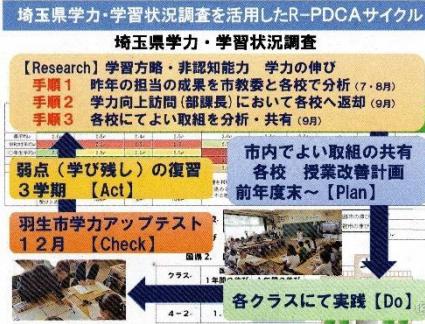
学校の組織運営として「適材適所」を意識している。学力を上げた教師や若い教師、苦手な教科がある教師と様々である。そのため、人材育成を意識した分掌等への配置を行っていた。さらに特命係という1年期限の分掌を設定するなど、教師のやりがい感をもたせる工夫がなされていた。

#### ◇ 県学力・学習状況調査データ活用事業における分析

県・市が主にデータを一括管理し、分析して活用できるデータを各学校に配布している。そのデータを各学校が積極的に授業改善や学級経営、個別支援等に生かしている。

#### 【Research】 学習方略・非認知的能力 学力の伸び

- 手順1 昨年の担当の成果を市教委と各学校で分析(7・8月)
- 手順2 学力向上訪問(部課長)において各学校へ返却(9月)
- 手順3 各校にてよい取組を分析・共有(9月)
- ※よい取組の市全体での共有化と実践の共有
- 手順4 12月にテストを実施し、3学期の取組に生かす
- 手順5 学級のデータを次年度の学級及び中学校に渡す



#### ◇ 地域・保護者への啓発

学力向上通信で学校の取組を保護者に啓発したり、学校行事等と参観を同じ日に行うなど、意図的・計画的に保護者を教育活動に取り込む。

### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 自校におけるR-PDCAサイクルの確立
  - ・次年度のResearchまでを見通した学力向上ロードマップの作成と年間計画への位置付け
  - ・非認知的能力の向上のための学校行事の計画実施を通じた評価の場の設定
- 学力向上のための組織運営
  - ・校務運営の核となる各部会の主任への働きかけ
  - ・共通確認事項の実施状況の把握

#### 【校内研修担当者・学力向上コーディネーターとして】

- 子どもたちの実態分析における6つの学習方略の活用
- 共通確認事項(学習スタイル・ノート指導・学習規律等)の提案と具体化、及び学力向上通信による啓発

### 【先進地域視察研修を通して実感したこと】

- 今後、若年層が増えるため、適材適所による組織的な学校運営のもと、9年間を見通した指導計画の作成、学校・家庭・地域が一体となった児童・生徒の育成が大切である。
- 非認知的能力が学力を支えるという視点から、R-PDCAサイクルによる評価・改善サイクルの見直しを進めていく必要がある。

## 共通テーマ「授業づくりについて」

### 取組の実際

#### ◇ 全校で統一したことの凡事徹底

・学習の進め方、ノートの取り方、発表の仕方等の共通理解と日常的な取組

※学習の進め方:南中スタンダード(つかむ・考える・伝え合う・振り返る)

#### ◇ わかるステップ1・2・3・3+を使った自己評価

- ・学習問題を把握し、自分で考える段階での自己評価の実施
- ステップ1:解き方が分からない      ステップ2:解き方が分かる
- ステップ3:発表、説明ができる      ステップ3+:ステップ3以上
- 自己評価を基に、個別支援や授業スタイルを変更
- ・振り返りの段階で自己評価の実施(ノートに記述)→自己伸長の自覚

#### ◇ 学習規律の徹底「田は日照り」「南中授業の約束」

〈羽生北小〉

・「田は日照り」(タイム着席、「はい」、ひじをのばす、「～です」「～ます」、りつよう)を合言葉にした児童自身による主体的な学習規律の整備

〈南中〉

・「南中授業の約束」「南中シェアタイムのルール」の設定による、落ち着いた学習規律の整備

#### ◇ 振り返りの積み上げ

・振り返りタイムの設定(書いていなくてもOK)



### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 子どもの自己評価等を活かした授業改善プランの年間カリキュラムへの位置付け
- 「よい取組」の共有と実践への呼びかけ

#### 【校内研修担当者・学力向上コーディネーターとして】

- 児童・生徒を見取る視点や方法を研修し、全学年・全教科でその日常化
- 学習の定着状況の実態と児童・生徒を見取る具体的な視点をもつために、全国学力・学習状況調査等をもとに「身に付けさせたい力」や「子どもたちの傾向性」の整理と、共通理解を図るための場の設定